≪春期≫

受 験 番 号

２０２６年度　大学院心理学研究科「前期博士課程」入学試験　解答

専門科目〔人間行動心理学専攻〕

評価	

Ⅰ　1.

（１）初期選択説（ブロードベントのフィルター説）
感覚器に入力された刺激のうち，特定のものにみを通すフィルターの存在を仮定し，刺激の物理的特性の処理の直後に注意が介入するという理論

（２）後期選択説（ドイッチとドイッチの選択的反応説）
感覚器に入力された刺激は意味処理段階まで同時並行で処理が進行したあと，反応ために必要な刺激を選択する際に注意が介入するという理論

Ⅰ　2.

（１）ウェーバー・フェヒナーの法則
ウェーバーは，1934 年に刺激の弁別閾は刺激強度に比例するという発見した。この関係はフェヒナーによってウェーバーの法則と名づけられた。フェヒナーは，1860 年に，このウェーバーの発見をもとに，刺激強度と感覚の関係を，$E=k\log R$ という式で表現した。すなわち，刺激の強さ（R）の対数をとったものに感覚の強さ（E）は比例する。この関係式は，フェヒナーの法則と呼ばれている。また，ウェーバー・フェヒナーの法則と呼ばれることもある。

（２）スティーブンスの法則
スティーブンスは，1957 年にフェヒナーの法則に代わる法則として，$S=kR^n$ という式を提案した。Sは，フェヒナーの法則の感覚量 E と違って，マグニチュード推定法で計測した感覚量となる。この関係式はスティーブンスの法則，あるいはスティーブンスのべき法則と呼ばれている。$S=kR^n$ の両辺の対数をとると，$\log S=\log k+n\log R$ となり，すなわち，刺激の強さの対数をとったものに感覚の強さの対数は比例する。

（３）信号検出理論
信号には多くのノイズが重畳していると考え，ある特定の情報，つまり信号が含まれているか否かを判断するプロセスをモデル化したものである。
　信号検出理論では、ヒット率（Hit Rate）:実際に信号があった際に正しく検知できた割合，ミス率（Miss Rate）:信号があったのに検知できなかった割合，誤警報率（False Alarm Rate）:実際には信号がなかったのに信号があったと誤って報告した割合，正棄却率（Correct Rejection Rate）: 実際に信号がなく，正しく「信号がない」と判断した割合の４つの指標が用いられる。

Ⅱ　1.

　ジグソー学習法は協同学習の代表的な学習技法である。従って、ジグソー学習法の手続きは協同学習の基本構造である「課題明示・個人思考・集団思考」の段階に大別できる。なかでもジグソー学習法の最も特徴的な手続きは「集団思考」を「専門家グループ」と「ホームグループ」とに分割している点にある。以下、段階を追って、ジグソー学習法の手続きを説明する。
　なお、学習課題を X とし、4 人ずつの 3 グループを前提として説明する。4 人グループが対象なので、学習課題 X を 4 分割し、x1、x2、x3、x4 とする。
　第 1 段階「課題明示」　ジグソー学習法で取り上げる課題を紹介し、学習目的を明確に伝える。加えて、ジグソー学習法の手続きを確認し、各段階における活動内容（時間配分も含む）について、参加者全員で確認する。
　そのうえで、4 分割した学習課題を各グループの 4 人のメンバーに分担する。
第 2 段階「個人思考」　分担した課題を 1 人で理解し、説明方法を考える。
第 3 段階「専門家グループ」　同じカ所を分担した他の 2 グループのメンバーと専門家グループを構成し、分担課題の理解を深め、説明方法をさらに検討する。
第 4 段階「ホームグループ」　上記の段階 2 と 3 を通して分担課題について深く理解し、有効な説明方法を獲得したメンバーが、分担課題を説明し、ホームグループ内で検討し、理解を深める。

Ⅱ　2.

メタ認知とは「認知についての認知」つまり自分自身の認知過程について認知することを意味します。ここで言う認知とは、知覚、記憶、学習、思考などを含む人間の認知、知的活動全般を指します。
　人が認知活動に従事しているとき、それを一段高いところからモニターするのがメタ認知の役割です。もし、その認知活動が適切ではないと判断された場合、認知活動をより適切におこなうためのコントロールをおこないます。この認知活動のコントロールも、モニターと同様、メタ認知の大切な役割です。この 2 つの役割を的確におこなうためには、メタ認知知識が必要となります。
　このメタ認知を身につけることにより、学習者の学習を改善したり、促進したりすることができます。実際、文章要約課題を用いたある実験において、要約の仕方を教える文章要約訓練群と、要約訓練に加えてメタ認知の訓練もおこなったメタ認知訓練群とを比較検討しました。その結果、両群とも訓練をおこなわなかった統制群に比べて成績がのびましたが、その伸びは文章要約訓練群よりもメタ認知訓練群のほうが高いという結果がえられています。
　この実験例からも推測されるように、メタ認知が適切に働かない場合、学習が上手く進んでいなくても、その学習法を望ましい学習法に修正することができません。結果として、努力しているにもかかわらず、効率の悪い状態に陥ることになります。学業不振の一因としてメタ認知の欠如が考えられます。

Ⅲ　1.

（1）
２つの道徳的に相反する選択肢の間で葛藤が生じる状況を描いたストーリーで、どちらの選択肢を選んでも、何らかの道徳的な問題が発生する可能性があり、どちらを選ぶべきか判断が難しい状況を提示し、主人公の行動についての正否とその理由について説明してもらう課題。具体的には、ハインツのジレンマ課題などがある。

（2）
Ⅰ.慣習以前のレベル（約 9 歳までの期間）
①服従と懲罰の段階（善悪を懲罰や服従で考える段階）
②個人主義と交換の段階（善悪を報酬や利益によって考える段階）
Ⅱ.慣習的レベル（思春期から青年期にかけて）
③喜びと「良い子」の段階（助けや喜びなど良い子であるかどうかで考える段階）
④法と秩序の段階（権威の尊重や法への服従、社会的側面を考える段階）
Ⅲ.脱慣習的レベル（全体の 10～15%の人が到達する）
⑤社会契約と個人の権利の段階（規則も大事であるが生命の尊さに気づく段階）
⑥普遍的倫理観原理の段階（万人を尊重する段階）

Ⅲ　2.

向社会性
・他者の利益になるような自発的な行動を指します。例としては、助け合い、協力、思いやり、ボランティア活動などが挙げられる。
・社会的な交流を促進し、感情的な安定にも繋がると言われている。
・利他的な動機だけでなく、事故の利益や社会的承認を求める利己的な動機も含まれることがある。

非社会性
・社会との関わりが希薄で、社会的な交流を避けたり、孤立したりする状態を指す。
・不登校、引きこもり、自傷行為などが非社会的な行動の例として挙げられる。
・不安やストレスを解消しようとする行動が、自己の内面に向かい、社会的不適応を起こす場合もある。

反社会性
・社会のルールや規範に反する行動を指す。
・暴力、窃盗、詐欺、薬物使用など、社会に害を及ぼす行為が含まれる。
・法律や倫理に反する行為全般を指すこともある。

Ⅳ　1.

心理学の幸福感研究には、快楽主義と幸福主義という二つの潮流がある。快楽主義は喜びの達成や安らぎの経験、苦痛の回避を重視し、人生満足度、ポジティブ感情、ネガティブ感情のなさといった主観的幸福感によって測定される (Diener et al., 2018; Kahneman et al., 1999)。幸福主義は善い人生や善く生きることを重視し、人格的成長、人生における目的、自律性などの心理的幸福感によって測定される (Ryff, 1995, 2018)。快楽主義と幸福主義は互いに重複する部分があるものの、快楽主義は結果としてのウェル・ビーイングに焦点を当てるのに対して、幸福主義はウェル・ビーイングに至るプロセスに焦点を当てる点に違いがある。

Ⅳ　2.

信頼の解き放ち理論によれば、日本は安心社会である一方で、北米は信頼社会である (山岸, 1998)。安心社会では、素性のよく知った相手と交流する機会が多く、伝統的な制度や秩序を維持しやすいというメリットをもつが、得られる利益や資源が限定されてしまうデメリットもある。それに対して、信頼社会では、素性のよく知らない相手と交流する機会が多く、新たな制度や秩序の構築が求められるというデメリットをもつが、より大きな利益や資源を獲得できるかもしれないというメリットもある。山岸 (1998) は、日本の閉塞感を打破するためには、安心社会から信頼社会に移行する必要があると論じている。